

であい



公益社団法人
北海道国際交流・協力総合センター
HIECC/ハイエック

Hokkaido International Exchange and Cooperation Center

北海道国際交流・協力総合センター（HIECC）では、設立当初より、北海道と気候風土の類似している北方圏諸国との交流事業を行い、2007年度以降、事業の一つとして「スウェーデン学校交流」を実施し、様々な専門機関のご協力をいただきながら、今までスウェーデンの高校生をインターンシップ生として4回（合計7人）受け入れてきた。

今年度は、スウェーデン・ノルショーピン市にあるナチュラルブルクス高等専門学校より「動物園における動物飼育」を専門とする2名（ペレ・ニルソン、ジュニファー・ビルグレン）の高校生を5月11日から6月2日まで受入れた。札幌円山動物園での2週間のインターンシッププログラムの後、二人はとわの森三愛高校（江別市）と札幌国際情報高校（札幌市北区）を訪れ、日本の高校生と交流した。



英単語を使ってカルタ遊び

特集

スウェーデンと日本の高校生の交流



「初めまして」。自己紹介はちょっと緊張気味

★スウェーデンの高校にドレスコードはありません

インターンシップ期間中は、学校のロゴがついた作業着姿だった二人だが、高校に行くときは、スウェーデンの高校に通うのと同じスタイルをあえて意識したとのこと。「自分の姿を通してスウェーデンの高校と日本の高校の違いを目で見て感じてもらいたい」と。派手なパンツにたくさんピアスをつけて学校に行くと、日本の高校生は興味津々。口元のピアスを見て驚き、「キヤー」と叫ぶ生徒もいたそう。

★来日後、日本の印象の変化

とわの森三愛高校では、獣医進学コースの1年生（15名）と2年生（10名）とそれぞれ交流。お互いに「動物」に関する

勉強をしていることから、スウェーデンの2人は学校生活やどんな勉強をしているかをプレゼン。日本の高校生も「牛の胃袋の働き」など学校で学んでいることを英語で発表した。その他にも英語カルタやしりとりゲーム等を通して双方が楽しい時間を過ごしていた。また、ちょうど訪問日直後に同校野球部の全校応援が控えていて、全生徒が一同に集い応援練習する場面も見学。スウェーデンの高校にはない風景は二人の目にはかなり刺激的に映ったよう。両国の高校生にとって驚きや発見があった交流となっていた。

また、国際情報高校では「国際文化コース」の2学年の2クラスに一人の生徒として参加し、日本の高校生の普段の学



タンチョウの展示場を手際よく清掃



インターンシップを終え「修了証書」を手に満面の笑み

校生活を体験。同コースに所属する生徒は英語が得意な子が多く、積極的に二人に話しかけていた。2つの学校での交流を終えた二人は、「高校生との交流は興味深く本当におもしろかった。3週間の滞在を通して、日本に来る前と来日後の日本のイメージがかなり変わりました」と語っていた。

札幌円山動物園でのインターンシップで学び得た知識や経験の他に、動物園スタッフの方と過ごした時間、そして日本の高校生との交流時間など、この3週間でのたくさんの思い出を二人はスウェーデンに持ち帰っていた。



講師の高橋伸行氏

平成24年度 「多文化共生ワークショップ in 函館」 避難所運営ゲームから 防災を学ぼう!

(2月23日 土曜日 函館市)



NPO多文化共生マネージャー全国協議会理事である高橋伸行氏による、「災害時に外国人が直面する課題と災害多言語支援センター」についての講演に加え、高橋氏の進行で避難所運営ゲーム（通称：HUG（H：hinanzyo、U：unei、G：game））を実施した。（会場：（財）北海道国際交流センター（hif）、函館市）

高橋氏は船橋市に在住しており、3・11で実際に目にした惨状の写真などを使いながら講演をスタート。紹介した写真の中には、帰宅難民が自転車を買って求めて長蛇の列を作った様子や液状化した娯楽施設等があり、北関東地域での被害状況などが良く伝わるものだった。その他、阪神淡路大震災や中越沖地震での外国人の被災状況等、また東日本大震災における被災地外で行った支援の内容についての話があった。

その後、講師によるHUGの説明の後、参加者が数グループに分かれて実際にゲームを体験。なお、HUGとは、避難者の年齢、性別、国籍やそれぞれが抱える事情が書かれたカードを、避難所に見立てた平面図にどれだけ適切に配置できるか、また避難所で起こる様々な出来事にどう対応していくかを模擬体験するもの。カードには被災者の居住地、名前、家族構成、年齢等が書かれていて、そのカードを講師がハイスピードで読み上げ、参加者が話し合いながら適切な場所に配置していく。しかし、実際にはカードの読み上げのスピードについていけず、焦りのせいか参加者同士の意思疎通が図れなくなったり、口調が少し乱暴になったり混乱した様子になった。実はそこにこのゲームの狙いがある。実際に災害にあったときには、その場で瞬時に判断しながら避難所の交通整理をする必要があり、ゲーム参加者は終了後にその苦労を実感したようだった。

ゲーム後はアルファ米などの非常食を試食しながら、実際に被災した時にどのような行動をすべきか、また平時からどのような心掛けをすべきか等について、参加者同士が自発的に意見交換をしていた。



お湯を入れるだけのアルファ米。
カレーやちらし寿司など味も様々。

「ODA政策会議」 北海道で 初の開催

(3月8日 金曜日 札幌市)



会議の様子

外務省とNGOとの定期協議会である「ODA政策協議会」が、初めて北海道札幌で開催された。会議には外務省NGO担当大使等国際協力局の職員、全国的に活動を展開しているNGOの代表メンバー、また道内で活動するNGO・NPOの関係者が参加。外務省からは、NGOと協働し実施しているODAの過去案件の報告や、ミレニアム開発目標の取組みや成果の報告があった。とりわけ2015年以降のポストミレニアム開発目標の話に重点が置かれ、「人間の安全保障」を重点理念の一つとする点や、NGO等の民間セクターなどより関わりを持ちながら、日本らしい支援を目指していくという話があった。

また、北海道での初めての開催ということで、道内で活動するNPOによる発言の機会もあり、外務省はODAを推進するにあたり、日本国内とりわけ北海道内において「開発」が先住民族の暮らしや環境にもたらした影響について検証すべきでは等、活発な意見交換がされていた。

道内 NGO・NPO 紹介 J.WORKS

J.WORKSは、北海道内の日本語ボランティアグループの草分けとして1987年に設立されました。月2回土曜日に、日本語や日本文化などへの関心や要望にこたえるための様々なテーマで「フリーレッスン」を無料で行っております。

まず、月に1度の「日本語レッスン」では、教科書中心の授業ではなかなか学べない実践的なテーマで、子どもの時のことを話したり、何か物について説明したり、など「言いたいことが言えるようになる。言いたくなる」レッスンを行っております。そしてもう一度は「文化レッスン」です。そこでは、俳句、書道などの他、和紙や着物の生地を使った和風小物の作成などを通じて、みなさんと手を動かし、クチを動かし、楽しく日本の文化を楽しんでいただいています。その他、



「もっと話したい!」という学習者の声を聞き、特にテーマを設けずただおしゃべりをする「おしゃべりタイム」も時々行っております。そこでは、日ごろの



疑問や、自分の国についてや日本についてなど、話したいことが次々と出て来ます。

これらのレッスンに加え、様々な日本の文化を一度に少しずつ「つまみ食い」のように体験してもらおうという趣旨で、年に1度「ニッポンつまみ食い」というイベントを開催しております。おにぎり作り、生け花、書道、着付け、伝承遊び等バラエティーに富んだ内容で、毎回多くの外国の方々で大賑わいです。このイベントも、今年4月に無事20年目を迎え、今年は200人を超える方が参加してくださり、会場からあふれるほどの大盛況でした。

今後も、日本や日本語についての「?」を持ってやってくる数多くの外国の方と、ご近所さんのようなお付き合いをしていけたら、と思っております。

J.WORKS

札幌市中央区北1条西3丁目 札幌MNLビル6階S.I.S内

代表 椿原博子

連絡先 080-1893-1293(高橋) 活動日時 土曜日 13:30~15:00



パラグアイのポトルダンスでは大きな歓声があふ

を使ってお国紹介。さらに、自分たちの国をより身近に感じてもらえるよう踊りも紹介した。パラグアイの小矢沢さんは伝統舞踊の「ポトルダンス」を披露。全てハンドメイドという鮮やかなブルーの衣装やポトルを頭に乗せる妙技に、子どもたちからは歓声が上がっていた。ブラジルの鈴木由美さんと幸さんは日系人がお祭で踊る新感覚?!の盆踊りを披露。ビートに合わせて踊る「盆踊り」に、子どもだけでなく先生までもがノリノリだった。

その後は、各教室で留学生がそれぞれの国の遊びを紹介。ポルトガル語とスペイン語の「伝言ゲーム」では、聞きなれない言葉を一生懸命覚える子どもたちの姿が印象的。結果はどのチームも珍解答続出で教室は賑やかな笑いに包まれていた。さらに、ポルトガル語・スペイン語講座もあり、留学生は先生さながらに「ありがとう」や「こんにちは」などのあいさつを熱心に指導していた。



みんなノリノリ「日系祭りダンス」

国際交流会 in 苫小牧市立拓勇小学校

(3月4日 月曜日 苫小牧市)

南米からの北海道海外技術研修員及び移住者子弟留学生の3名が、苫小牧市立拓勇小学校を訪れ5年生214名と交流した。

初めに体育館に集合した5年生全員を対象に、留学生たちがパワーポイント



スペイン語とポルトガル語で挨拶。できるかな?



パラグアイの小矢沢さんは「自分のルーツである北海道の子どもたちにパラグアイを紹介でき楽しい時間を過ごせました」と語っていた。さらに日本の子どもたちに一番楽しかった遊びを聞くと「ブラジルのバタタ・ケンチ(ポルトガル語で熱いイモという意)が、新しい遊びで楽しかった」と感想を語っていた。

遊びや踊り、そして言葉を通して地球の裏側にある南米の2つの国を子どもたちは身近に感じる機会となっていた。来年ブラジルで開催されるワールドカップを見るときに、今回交流した留学生のことを思い出すのかもしれない。

さっぽろ 留学生日記

きっかけは母国の台風被害
人々の生活を良くするための
研究がしたい



ジェラミ ヴィラジャゴ デイマピリス さん
フィリピン共和国
(北海道大学大学院工学研究科修士課程)
河川領域工学専攻

2009年、フィリピンの大学の工学部で学んでいるときに、公益社団法人土木学会の研修にフィリピン全土から唯一のメンバーに選抜され、日本に1週間ほど滞在。整然とした街並み、日本語の礼儀正しさに感銘を受け、さらに研究を深めようと北海道大学に留学することとなった。

日本に留学した理由

「私の専門は土木工学で、この分野といえば“日本の技術力”がパッと頭に浮かびます。また、幸運にもパナソニック奨学生として選ばれたのも理由の一つです」と。文化や習慣が異なる日本に来ることへの不安については、「2010年に大学を卒業したとき、大きな自信をつけることができたので、新しい環境で学ぶことに一切の不安はありませんでした」と。

研究分野のパイオニアになりたい

土木工学を学ぼうと思ったきっかけは、幾度となくフィリピンを襲う台風被害の経験が背景にあるそう。「土木工学といっても、建設や計画、水道など多岐にわたりますが、中でも人々の生活を良くするための研究がしたくて河川工学を選びました。また、河川領域工学、特に岩盤河川につ

いての研究はまだあまり進んでいないし、その分野で新しい道を切り拓いていきたいという目標もあります」と。

札幌の生活は“ちょうどいい”

「札幌は東京や大阪に比べるとリラックスできるし、都会過ぎずちょうどいい」と語るジェラミさん。北海道に来てから訪れた印象的な場所は、「研究室の人と一緒にいった登別。専門分野の影響か自然の脅威を感じる場所が好きみたい」と。また、日本の食べ物で一番好きなのは味噌汁だそう。「初めて味噌汁を飲んだ時、味に慣れず全部食べられなかった。でも、今では味噌汁がない食事は考えられないほど大好きです」と。いつからそうなったか本人もわからないらしい。

将来の目標

「まずは無事に修士課程を卒業すること。そのあとは大学院に行くか就職するかはわからない。でも、最終的にはコンサルタント会社に入って計画の一部を担う人材になりたい」と。将来を語るジェラミさんに“開拓者”として活躍する姿が映るようだった。



登別を訪れたとき(左側がジェラミさん)

留学生サポーター・国際交流ボランティア制度のご案内

北海道国際交流・協力総合センター(HIECC)では、地域での国際交流・協力活動を支援するため、道内大学に在籍する外国人留学生や、通訳を行う国際交流ボランティアを各地に派遣しています。

派遣に係る謝礼は不要(但し交通費は除く)ですので、学校や市町村、国際交流団体の皆様はぜひ積極的にご利用ください。

留学生サポーター制度の概要

派遣者: 道内在住の外国人留学生(大学院生) / 登録人数: 50名
派遣内容: 市町村や学校、国際交流団体などが実施する異文化交流、相互理解、国際理解等のイベントへの参加など

国際交流ボランティアの概要

派遣者: 国際交流ボランティア(通訳・翻訳) / 登録人数: 道内全域 計53名(英語44名、中国語5名、ロシア語3名)

派遣内容: 市町村や国際交流団体などが実施する交流事業の通訳・翻訳業務の協力など

詳細はHIECCのホームページ(<http://www.hiecc.or.jp/>)をご覧ください。

お問い合わせ先: TEL 011-221-7840(担当:交流・協力部)



派遣先での留学生サポーター



公益社団法人
北海道国際交流・協力総合センター
HIECC / ハイエック

〒060-0003 札幌市中央区北3条西7丁目 道庁別館
発行日: 2013年7月10日
TEL.011(221)7840 FAX.011(221)7845 <http://www.hiecc.or.jp>
E-mail: intc@hiecc.or.jp (交流・協力部)
印刷: 岩橋印刷株式会社